

# のら犬

新美南吉

青空文庫



常念御坊じょうねんごぼうは、暮ごがなによりもすきでした。きょうも、となり村の檀家だんかへ法事ほうじでよばれてきて、お昼すぎから暮ごをうちつづけ、日がかげつてきたので、びっくりしてこしをあげました。

「まあ、いいじゃありませんか。これからでは、とちゅうで夜になつてしまいます。今夜は、とまっていらつしやいませよ。」  
と、ひきとめられました。

「でも、小僧こぞうがひとりで、さびしがりますから。さいわいに風もごごいませぬので。」

と、おまんじゅうのつつみをもらつて、かえつていきました。

常念御坊じょうねんごぼうは歩きながらも、暮ごのことばかり、考えつづけて

いました。さっきのいちばんしまいの、あすこのあの手はまずか  
つた。むこうがああきた、そこであすこをパチンとおさえた、そ  
れからこうきたから、こうにげたが、あれはやつぱり、こつちの  
ところへ、こうわたるべきだつたなどと、むちゆうになつて、歩  
いてきました。そのうちに、その村のはずれに近い、烏帽子えぼしをつ  
くる家の前まできますと、もう冬の日も、とつぷりくれかけてき  
ました。

しばらくしてなんの気もなく、ふと、うしろをふりかえつてみ  
ますと、じきうしろに、犬が一ぴきついてきています。きつね色

の毛をした、耳のぴんとつたつた、あばらの間のやせくぼんだ、ぶきみな、よろよろ犬です。どこかここいらの、かい犬だろうと思ひながら、また碁ごのことを考えながらいきました。

一、二丁ちよういって、またふりむいてみますと、さっきのやせ犬が、まだとぼとぼあとを追ってきています。うす暗いおうらいのまん中で、二、三人の子どもが、こまをまわしています。

「おい、坊ぼう。この犬はどこどこの犬だい。」

子どもたちは、こまを足でとめて、御坊ごぼうの顔と犬とを見くらべながら、

「おらア、知らねえ。」

「おいらも、知らねえ。」

といいました。

常念御坊じょうねんごぼうは、村を出はずれました。左右は麦畑のひくい岡おかで、人つ子ひとりおりません。うしろを見ると、犬がまだついてきています。

「しつ」といって、にらみつけましたが、にげようともしません。足をあげて追うと、二、三尺じやくひきさがって、じつと顔を見ています。

「ちよつ、きみのわるいやつだな。」

常念御坊じょうねんごぼうは、舌したうちをして、歩きだしました。あたりはだんだんに、暗くなつてきました。うしろには犬が、のそのそついてきているのが、見なくもわかっていきます。

すつかり夜になってから、峠とうげの下の茶店のところまできました。まつ暗い峠を、足さぐりでこすのはあぶないので、茶店のばあさんに、ちようちんをかりていこうと思いました。

おばあさんは、ふろをたいていました。ちようちんだけかりるのも、へんなので、常念坊じょうねんぼうは、

「おい、おばあさん。だんごは、もうないかな。」  
とききました。

「たった五くしのこっています。」

「それでいい。つつんでおくれ。」

「はいはい。」

と、おばあさんは、だんごを竹の皮につつまみます。

「すまないが、わしに、ちようちんをかしておくれんか。あした、  
正しょうかん観かんにもつてこさせるでな。」

「とても、やぶれちようちんでござんすよ。」

「いいとも。」

おばあさんは、だんごをわたすと、上へあがつて、古ちようち  
んのほこりをふきふき、もつてきました。常じょうねんぼう念坊ぼうは、ちよう  
ちんにあかりをつけると、あたりを見て、

「おや、もう、どつかへいったな。」

と、ひとりごとをいいました。

「おつれさまですかね。」

「いんにや。どこかの犬が、のこのこついてきて、はなれなかつ



「たんだよ。」

「きつねじゃありませんか。あなたの通つていらつしやつた、あのさきのやぶのところ、よくきつねが出て、人をばかすといひますよ。」

「おもしろくもないことを、いいなさんな。ほい、おあしをここへおくよ。」

じょうねんぼう

常念坊

はかた手におまんじゅうのつつみと、ちようちんをさげ、かた手にだんごのつつみをもつて、峠とうげにかかりました。その峠をおりて、たんぼ道を十丁ちようばかりいくと、じぶんの寺です。

もう、あのいやな犬もついてこないのです、安心して、てくてくあがっていきますと、やがてうしろのほうで、クンクンという声

がします。

「おや、また、あの犬めがきたな。」

と、じょうねんぼう常念坊は思いました。

かまわず、どんどんいきました。ふと考えました。うしろからくるのは、犬ではなくて、おばあさんがいった、あのきつねがつけてきたのではなからうか。こう思うと、じぶんのうしろには、ずるいきつねの目が、やみの中に、らんらんと光っているような気がします。氣の小さなじょうねんぼう常念坊は、ぶるつと、身ぶるいをしました。

でも、うしろをふりむくのもこわいので、ぶきみななりに、ぐんぐん歩きました。なんだかうしろでは、きつねがいつのまにか

女にばけていて、今にも、きやつと行って、とびついてきそうな気がします。

じょうねんぼう

常念坊は、そのきつねのことを、わすれようわすれようとするように、ちようちんのあかりばかりを、見つめて歩きました。

二

やつとのこと、村へきました。村へはいると、すこしほつとしました。村では、どこのうちも、よいから戸をしめてしまうので、どつこも、しいーんとしています。その中で、どこかのうちで、きぬたをうつ音が、とおくにきこえます。

そのとき、ふと気がついてみますと、左手にもついていた、だんごの竹の皮づつみが、いつのまにか、なくなっています。

「おや、しまった。うっかりして、落としたかな。それともきつねのやつが、そつと、ぬすみとつてにげたかな。ちよつ。」

常念御坊じょうねんごぼうはいまいますように、おまんじゅうのつつみと、ちようちんとを両手にもちわけて、うしろをむいてみました。

もう、なにもありません。やがて、寺の門の前にきました。立ちどまつて、もう一ぺん、うしろをよく見ますと、きつねらしいものが、のこのこつけてきています。

常念坊じょうねんぼうは門をはいると、

「正観しょうかん、正観。」

と、庫裡くらのほうへむかつてどなりました。

「はい。」

とへんじがきこえて、正しょうかん観かんが、ごそごそ鐘しょうろう楼ろうからおりてきました。

「おい。きつねだ、きつねだ。ほうきをもつてこい、ほうきを。」

ほうきで追おいまくれよ。」

正しょうかん観かんはとんでいって、ほうきをもって、門かどのほうへかけつけました。

「おや。きつねがなにか、くわえていますよ。」

「ああ、だんごだ。とりあげろよ。」

「はい。下へおけ。——だんごは、とりかえしましたが、きつね

はずわったきり、にげません。」

「だから、ほうきで追っばらえというのに。」

「ちきしよう。にげんか。しっ、しっ、しっ。」

と、正しょうかん観かんはほうきで追いまくりました。

「ほうい、ちきしよう。こらっ。」

と正しょうかん観かんは、そつちこつち追いかけて、とうとう外へにがして

しまいました。

「にげたか。」

「にげました。」

「正しょうかん観かん。」

「はい。」

「なんでおまえは、今ごろしよろう鐘楼なんぞへ、あがっていたのだ  
。」

「さびしかったから。」

「鐘楼へあがってれば、さびしくなくなるのか。」

「鐘をゲンコツでたたくと、おん、おん、おんと、和尚さんの  
声みたいな音がするんです。」

「なにをいいおる。」

和尚さんは、ころもをぬいで、ろばたで、おぜんにすわって、  
ざぶざぶと、お茶づけをながしこみはじめました。正観は、  
おみやげのだんごを、ひろげました。

「和尚さん。あの犬は、どこからついてきたのです。」

「となり村から、しつっこく、あとをつけてきたのだよ。」

「どうして。」

「どうしてだか、知らないよ。」

「ばかしゃあ、しませんでした?」

「おれがきつねなぞに、ばかされてたまるかい。」

「きつねですか、あれは。」

「……………」

「犬みたいだったがな。そのしょうこに、正しょうかん観かんはそばへよつても、ちつとも、こわくはなかつたがなあ。」

常念じょうねんごぼう御坊ごぼうは、はしをおいて、考えこんでいました。あんど

んのあかりが、そのくるくる頭へ赤くさしています。



しばらくして、常念御坊は、

「正観。」

と、すこし、きまりわるそうにいいました。

「そのちようちんを、つけよ。」

「はい。」

「わしは、ちよつと行って、さがしてくるでな。おまえは、  
堂うのえんの下へ、わらをどつきり、入れといてくれ。」

「なにをさがしに？」

「あの犬を、つれてくるんだ。」

「きつねでしょう、あれは。」

「かわいそうに。犬なら、のら犬だ。食いものも、ろくに食わん

本ほんど

とみえて、ひどくやせこけていた。はるばる、となり村から、わしについてきたのだから、あつたかくして、とめてやろうよ。」

それに、わしの落としただんごまで、ちゃんと、くわえてきてくれたんだもの。おれがわるいよと、これだけは心のなかでいて、常念御坊じょうねんごぼうは、ちようちんをもって、出ていきました。

# 青空文庫情報

底本：「新美南吉童話全集 第一巻 ぐんぎつね」大日本図書

1960（昭和35）年6月20日初版発行

1978（昭和53）年7月31日34版発行

初出：「赤い鳥」

1932（昭和7）年5月号

※底本で括弧書きされている編集部注は削除しました。

入力：鈴木厚司

校正：佳代子

2004年2月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# のら犬

新美南吉

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>